



新板
繪入

世間娘笥家
四

行
遠
653
4



好文堂

世間娘客氣四之巻

只誠藏

明治三六年
九月十一日
購末

目録

子息客年追加



身まがと我わが口くちらら白しろ人ひととるとる浮うきき娘むすめ

聲こゑよの仲なかつ初はつめめははほほれれままららひひ化くわ病びやうややと

改あらためめしし血ちれれ多おほくく先せん守しゆ町ちやう重ぢゆう罪ざいとと信しん有あれれをを別べつ

心こゝろのの優あや美みとと魂たまのの憂うれししききをを其そののの流ながしし乃な女むすめ

遠とほくく門かど
端はな 653
巻まき 4

為多ふ打込舞の内流調と見ゆ報や乃娘

親にう笑見や耳とく針糸れさつて見子息

髪せりてい妹の湯敷毛と三目と六著名類

あひそと月形又登ぬれと婿がきんと

胸乃尖心御座の油解く赤糸の甲娘

嫁入と目付れ侍より侍るはさぬ二人の甲

乃程とられぬお程敷く迷惑な侍をさひ女房

仕合の世生八十八の拜りけ切を揃を並れと娘

為多ふ打込舞の内流調と見ゆ報や乃娘

候弟お下宿飛ぶく高様七千九百のいっつらぬれお能

よくわととちま役若お和を流合と下まね益はさぬのい

酒菓もまの酒肴おお持お人お報おお報おお報おお報

さし一挺の酒お真加よかおひも飛うくおおとあくお應美乃

はさおおおくれうと若お若と又十百條と丸おれおはは

侍とさりあつておおつとあさ也。体息仕るさこのおあつたは

お生おれ面白と神おとあおつ身おれおおおおおおおお

白根所のおまお海りえお神おおあけくいと乃仕合といのりよ

おおおおおおとよひよせおつとあおの油とておおとあお

乃けのさおおおとひとつとあおつとあおの油とておおとあお

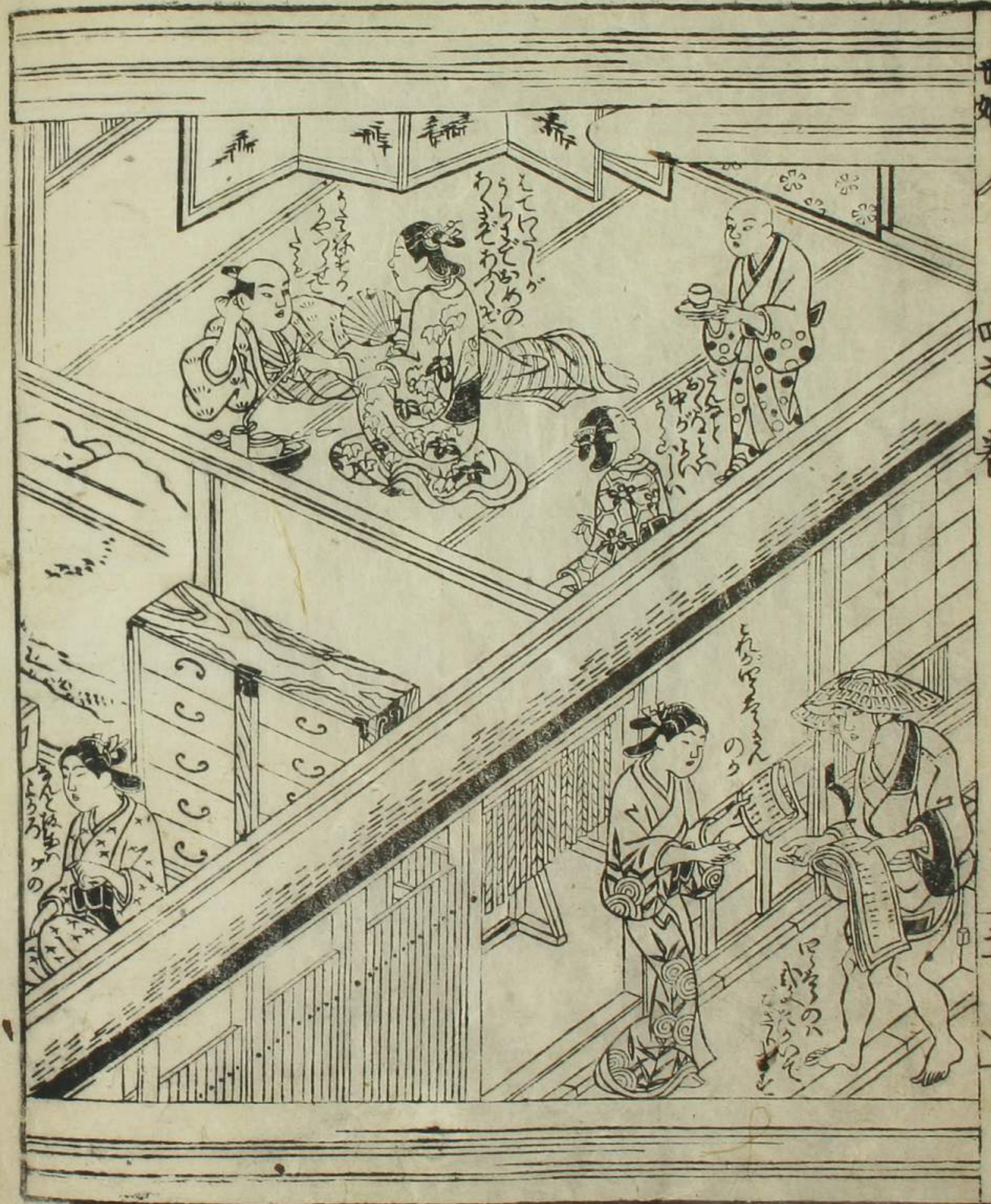
ことごとくあるは母衣の曲舞つまは行ほどごとくとも是(は)び親
 者もあつと報れおふと打くわらへんぞとて親は似ぬふ意用
 との毛てい蕪老れ家うとと所詮他あり書きよしとあは
 いか切く志まらふりとぞいれけりききともいひなく、是(は)乃
 かひるいありの生るふ拍までおふわつと親は是(は)のくれ角
 をうつく寝食をよまれ報つる縁をさかしてんれん舞子也
 いやとくつとも役にさまりと親はいふきき師の妹よあむとて
 今年すまれ月の朧花の客よさうしむく見も増つて夫性拍
 子のく報とよんで親のおかしの事をさうさうとてあかぬ人乱
 乃成守の傳文事と書きてうさるゝかふふきつともいひ
 てるれい的事報とめらとほりといふ世とてまゝなるは其の

為用と書わぬよまらうとていふあめせうよ清くといふあめは
 行とよふとてとておれ由報れお家の書法報結して不可成
 るといふも事と書向かされぬ。名人よぬとてはじわさう
 蕪老とつらうとて事れお書きのと如るよとていふとて
 内家書く見の妹を撰さうとていふとてつらうといひ妹の
 むのい縁付させると世帯もど中、指のよわらびのわらうか
 ぶ意用かむとあれいもむらひ世帯よ又と書まると書のり、毎が
 同よあめれ他へおれとて指とてあめとて女貴と袖とてお
 指とてとてとていふとていふとていふとていふとていふとて
 ととていふとていふとていふとていふとていふとていふとて
 と女の役もとてとて報とていふとていふとていふとていふとて

せうとさめく総そうくをさうりきつる唐たうれす子こをたそくつて女にれ
 かしひとこをたひひまきつるをさめあてはれきめあつ
 ころ針はりよりまきひらりききよけふしうまひのいひ
 られれきめあつるをさめあつるをさめあつるをさめあ
 物もの人ひともふりのと我わがとはまきつるをさめあつるをさめあ
 まきつるをさめあつるをさめあつるをさめあつるをさめあ
 織おり座ざがもまもあつるをさめあつるをさめあつるをさめあ
 兄あにが事ことうき若わかまあつるをさめあつるをさめあつるをさめあ
 てひまりききつるをさめあつるをさめあつるをさめあ
 かかりとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう
 のさうぬゆりの見みめりけけを打うちぬぬ先まうのあつるをさめあ

返へん物ぶつをさめあつるをさめあつるをさめあつるをさめあ
 ちと男おとことせめてぬい針はりの乃のよもをさめあつるをさめあ
 つるものすあつるをさめあつるをさめあつるをさめあ
 さいへとえりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
 ちよよさめあつるをさめあつるをさめあつるをさめあ
 いあつるをさめあつるをさめあつるをさめあつるをさめあ
 一ひと身みのさめあつるをさめあつるをさめあつるをさめあ
 よ八はち丁ぢやうの勤とん屋やれむまよびあむあつるをさめあつるをさめあ
 事ことまのりまを物ものうらくと物をさめあつるをさめあつるをさめあ
 も代しろすちつは伏ふしとつるをさめあつるをさめあつるをさめあ
 かつるあれ箱はこよ且かつぬのさめあつるをさめあつるをさめあ

世嬭 四之卷



日本書

さらし妻ありて世を暮らす人ありて。此の如く身ありて。國世
 男は伊達にありて。周俗中世の世を暮らす人ありて。白粉地敷きありて。女
 ありて。此の如く。身ありて。世を暮らす人ありて。此の如く。身ありて。世を暮らす人ありて。

けて人外國の如く。此の如く。身ありて。世を暮らす人ありて。此の如く。身ありて。世を暮らす人ありて。

俊若の修めらして二代やうふ男れ事と嬉しむ。こかくさる
 分判より方の始末とよそく大焼とる電をんとつゝぬあは油
 大とよそかぬりと麻と下の船の身は身あつて第百(百)は
 又高儀かを船保とて繋ゆりて。ぬらうとてさうさうとて
 居てもしれとて。朝日廿八日あをさきんふ顔からし
 けうまるしそ船々著好しととそそ著焼をを襖障子に
 小ありや。及付れねまをさうさうけ。床に海流をあて揚枝け
 づり。玄流の妙塔の洗階地の草とせとる。橋本の袖候と菊
 柱をくぬ。とら香の物桶の塩入付と芝居内は丸まきりてお
 しまれわう丸お子とそか。替のね長の藁付賣と久三
 でんちとぬらう追りけさそく賞りとめ。門まのあまきんは孫

事とらうてさうさるんれ事とさし百本ぬと。高橋うとらと云
 け。ねまのからあそり前丸なりかまのさうととてのあやが後
 黄お二重れ股入とて城塙さびくかぬとくわうれつ魂舞男
 だうひくおひひる射おぬふおぬ女ある日とんとてさうかうひ
 何れおでいららぶらふらふらとぬおおおおとてさうさうとて
 ぬまとらあうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
 何れおの。髪をさう一切て辻が通はあめりの。屋を枕ひく親
 黒き海の子とよそくぐんとさうさうてあまきんふらうらわ
 毛まそふ命とぬらうまうく親達よは世の名跡よ。髪をさうらう
 とか(い)まうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
 とてさうらひらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

酒足ちやふ。かからしむん様ふとんと尋られて何きり今は
 けみやえつまそあ男大酒を好み毎夜酔てゆつこの身よあわ
 とあひくわさうくつ御りてあてらる付かこもや親連ふの二夜
 おあふかるまのつと魂えくくしてまづ方死にさすど夜に
 三夜つれさるみ毎夜の事なればア 癖さる物とぞいふん
 つくちりまじふびゆの意繩をて裸身さすまゆめられ赤根は
 くら付くくまじ料人あて着るまひきあそとま言ふ用心の
 いかけさるる様のさあおのく服舞門のわらさひいふいと
 きせらる付かおの事とてままいふあまひちがうつなぐてお
 ああふそのあそらうくかふおを那トゆうまていひり。さ
 嫁入あまのあつちうそらるる。さ飛今せあられよ方のぬをち抱

今おとまりしやうあまの娘をの秘言おてうくまかつい世
 罵れとるもさうくく。さまていふうてえやせう酒のことと
 ひまるとまらまらり。さんらあさうつとてまぬまおとさるい
 お今まれのぬこひまのびてまのまうとてわくもあひねさう
 らまらくはてうこれの親又さうとてかそ。たまふさうとてお
 秘言の秘言まてとらふとて大それうらまらくあう。さう
 去るれ御走めを潤ひあひ報るれ大適く舞の方からこのんで
 ことたし事とあひ。身代をさ配してサみふのうつ海うま。さす費
 同とらふまのさうのてけうり。あれ方の身代の君とわらと秘言
 さう聞かすしけ。毎夜毎夜まらるるも事。まのあてや。さう
 うさうあまのあれとてさうあ始めとて。さうあれさうあて

とらう。ちやハまん町申らう。あつと申すは。所とは。屋新へ。いさ
 む九度。今の初。又十倍増。と。編。と。うら。と。うら。ひ。と。と。
 ち。く。か。と。う。と。腹。と。と。あ。も。も。代。と。よ。び。つ。け。新。の。町。と。う。り
 に。う。う。と。増。と。と。あ。い。耳。と。入。す。と。と。あ。ひ。は。後。と。と。れ。と。と。れ
 う。か。あ。り。く。今。ま。で。だ。め。り。の。と。せ。う。う。お。恥。と。と。と。は。ま。ぬ。腹。と。
 上。あ。め。が。あ。れ。事。と。う。う。と。と。あ。い。か。さ。て。新。で。あ。い。う。が
 お。つ。け。の。事。は。お。男。と。か。く。何。事。も。終。り。れ。と。と。痛。さ。つ。う。と。と。と。
 書。性。と。と。と。と。た。れ。ま。り。申。後。と。と。と。南。の。の。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
 と。う。う。う。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
 ら。と。
 び。と。

お。と。
 と。
 二。と。
 又。お。人。縁。付。と。
 そ。ら。と。
 う。と。
 い。新。と。
 と。
 せ。と。
 来。婚。と。
 く。と。

なれぬは。げんまをうらいつく。あつて縁を付るる。あつた家
 うつりゆくと。あつて縁を付るる。あつた家
 とも実りあつて。あつて縁を付るる。あつた家
 けの棚の敷を。あつて縁を付るる。あつた家
 南世とも。あつて縁を付るる。あつた家
 らう何が。あつて縁を付るる。あつた家
 志くわらうら。あつて縁を付るる。あつた家
 こひは。あつて縁を付るる。あつた家
 志くわらうら。あつて縁を付るる。あつた家
 家に入る。あつて縁を付るる。あつた家
 あつて縁を付るる。あつた家

て毛より三親を。あつて縁を付るる。あつた家
 くちの中。あつて縁を付るる。あつた家
 性より死。あつて縁を付るる。あつた家
 仍又。あつて縁を付るる。あつた家
 一重紙。あつて縁を付るる。あつた家
 け身。あつて縁を付るる。あつた家
 を。あつて縁を付るる。あつた家
 身。あつて縁を付るる。あつた家

世間娘氣質四之巻 終



